



『当院で診断のついた 肺結核患者について』

内科部長 江木 康夫



日本では2021年の新規結核患者の罹患率は人口10万対9.2と初めて10を切り、結核低蔓延国の仲間入りを果たしました。

しかし2023年度は全国で年間1万人以上の新規感染者及び約1600人の死亡者を認めています。今回、結核の総論と当院で診断した肺結核患者4名の症例報告、当院での結核感染対策及び若干の公衆衛生学的データについて発表しました。

肺結核の主な症状としては、・2週間以上持続する咳や痰・血痰や喀血、胸痛などの呼吸器症状、・発熱（微熱とは限らない）・寝汗、食思不振、全身倦怠感、体重減少等の全身症状、・初期には無症状のことも多い等が挙げられます。

当院で経験した肺結核の4症例は上記の症状や血液検査異常などのいずれかを伴っており、CTでの評価を必要としました。また、2症例は胸部レントゲンで空洞性病変を伴っており、肺結核の可能性を考慮しました。1症例は非結核性抗酸菌症との鑑別が必要でした。1症例は胸部単純レントゲンでの異常所見の指摘が難しく、CTにて肺結核の可能性が示唆されました。いずれの症例も肺結核が疑われた段階で個室隔離し、感染対策を行いました。その後、喀痰での結核菌PCR陽性で肺結核と診断し、結核専門医療機関へ転院・加療されました。

なお2023年の結核登録者情報調査年報では、新規結核患者の罹患率は人口10万対8.1と年々減ってきております。都道府県別では関西圏の罹患率が高く、東日本の罹患率は低い傾向にあります。しかし18道府県では前年度より罹患率上昇を認めており、順調に罹患率が減少していない地域も存在すると考えられます。

はじめに

- ・日本の2021年の新規結核患者の罹患率は人口10万対**9.2**と初めて10を切り、低蔓延国の仲間入りを果たした。
- ・これは医療や生活水準の向上により新規結核患者数は年々減少傾向にあると言われている（ただしCOVID-19の影響の可能性も指摘あり）。
- ・しかし**全国で年間1万人以上の新規感染者**及び**約1600人の死亡者**がいる（人口10万対での死亡率は1950年146.4→2023年1.3）。

結核とは

臨床的特徴

- ・感染経路は主に気道を介した**飛沫核感染**（第2類感染症）。
- ・感染源の大半は喀痰塗抹陽性の肺結核患者であるが、ときに培養のみ陽性やまれに菌陰性の患者や肺外結核患者が感染源になることがある。
- ・感染後数週間から一生にわたり臨床的に発病の可能性があるが、**発病するのは約30%程度**。
- ・若い患者の場合、発病に先立つ数ヶ月～数年以内に結核患者と接触歴を有することあり。

2023年結核登録者情報調査年報の結果①

表 新登録結核患者数と罹患率				
	2020年	2021年	2022年	2023年
新登録結核患者数(人)	12739	11519	10235	10096
罹患率(人口10万人対)	10.1	9.2	8.2	8.1

- ・結核罹患率**10以下**を**結核低蔓延国の水準**と言われている。
- ・日本の結核罹患率は、米国(2.6 2022年)等他の先進国の水準に年々近づき、近隣アジア諸国に比べても低い水準である。
- ・ただし2020年以降の結核罹患率の減少については、**COVID-19の影響**も指摘されている。

2023年 結核登録者情報調査年報集計結果より

2023年結核登録者情報調査年報の結果②

2023年新規結核罹患率(人口10万人対 全国平均 **8.1**)

結核罹患率の低い5都道府県	結核罹患率の高い5都道府県
岩手県 3.6	大阪府 13.1
山梨県 4.0	大分県 12.2
山形県 4.4	奈良県 10.8
宮城県 5.2	兵庫県 10.2
長野県 5.2	京都府 9.9

- ・東日本に罹患率の少ない都道府県が多い
- ・広島県は**7.8**と全国で**28番目に低い(前回7.1)** **18道府県で増加**

2023年 結核登録者情報調査年報集計結果より

次回の関係医師懇談会は**3月25日(火)**を予定しています。

詳細が決まり次第ご案内いたしますので、ぜひご出席のほど、よろしくお願いいたします。

